大阪商業大学学術情報リポジトリ

飯田耕二郎著『ホノルル日系人の歴史地理』

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学比較地域研究所 公開日: 2022-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河原, 典史, KAWAHARA, Norifumi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1226

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

〔書評〕

飯田耕二郎著『ホノルル日系人の歴史地理』

河　原　典　史

Ⅰ

評者が幼少の頃、「10問正解して夢のハワイへ」というテレビのクイズ番組があった。日本人にとって、「あこがれのハワイ航路」が少しずつ現実のものになっていた。その頃に活躍していたプロ野球の監督がハワイ出身で、「ヨナミネ」という名前から沖縄県出身の移民であることがわかった。芸能界では、腰に手ぬぐいをぶらさげた「ムッシュ」も移民に関わっていた。

明らかに私事から書き始めたことを、お許しいただきたい。要するに、1960～1970年代の日本では、第二次世界大戦以前のハワイ移民の軌跡がまだ身近なものであったように思われる。このように、どこかでハワイ移民の１コマが脳裏に刻まれ、評者は現在の日系（日本人）移民史研究に携わるようになったのかもしれない。ただしハワイではなく、カナダへの日系漁業移民史が中心ではあるが……。当時では、テレビを通じてハワイ日系移民史に触れる機会があった。しかし、現在の若者がこの史実を知ることはあるのだろうか。そこで、微力ながら移民史に関わる評者は、飯田耕二郎『ホノルル日系人の歴史地理』を紹介したい。

本書は、飯田耕二郎による前書『ハワイ日系人の歴史地理』の続編である。前書ではハワイ諸島全域から日系移民史を俯瞰し、彼らが従事したおもな職業のうちコーヒー豆栽培、漁業や養豚業などについて、その地域的分布と出身者が考察されている。それに対し、本書はハワイ最大の都市・ホノルルに焦点をあてたものである。おもにサトウキビ栽培に従事したハワイ日系史をふまえ、本書では都市部での生活史が丹念に描かれている。そのとき、景観を復原する歴史地理学的アプローチが、両書を貫く著者の研究姿勢である。なお、久武哲也が自らの家族史とともに前書を紹介しているので、この書評も参照されたい[1)]。

１）久武哲也「〔書評〕　飯田耕二郎著『ハワイ日系人の歴史地理』」、地域と社会７、147－151、2004。

Ⅱ

著者と同様に歴史地理学の看板を掲げている評者から、本書を紹介してみよう。まえがきに続く本書の構成は、以下の通りである。

第１章　エスニック構成とその内容
第２章　アアラ地区における日本人街
第３章　モイリリ地区における日本人町
第４章　近郊農業地区マノアにおける戦前の日本人
第５章　日本人漁業
第６章　山口県沖家室島の出身者
第７章　日本人旅館の変遷
第８章　日本人館府（キャンプ）

あとがきに続いて、資料 『かむろ』にみる沖家室出身のホノルル在住者の動向、そして、人名索引と事項索引が添えられ、本書は閉じられる。

それでは、各章について順に紹介しよう。第１章では、都市化が急激に進んだ1910～40年におけるホノルルの居住地、および職業に関するエスニック構成の特色とその変容が、米国国税調査（U.S.Census）の統計をもとに明らかにされている。その特色として、白人は公務員や専門職事務関係など、いわゆるホワイト・カラーに就くことが多い。対する日本人では家庭・個人雇用に関わる仕事が多く、やがて商業関係への進出がみられた。中国人の就業では農業や商業が中心で、ハワイ人は沖仲士をはじめとした肉体労働に多く就いた。それに対し、混血ハワイ人では専門的な仕事が顕著であり、1920年頃より増加してきたフィリピン人は軍関係の労務、工場労働者や炭坑夫が多かった。居住地域に関しては、白人居住区は丘陵地の住宅や沿岸部の景勝地に集中し、日本人を中心とするアジア系の居住区は低湿地の縁辺に広がっていたという。とくに、中国人はダウンタウンの近くにチャイナタウンを形成し、日本人はそれより東方で領府（キャンプ）を核とした新しい居住地を発展させたという。

第２章では、第二次世界大戦前の日本人街が数枚の地図を利用して復原される。さらに、そこで商業を営んでいた人々が人名鑑などを用いて明らかにされている。戦時中、この地域の多くの商人たちが抑留されたことは、日本人社会にとって大きな痛手であった。戦後、市街電車の廃止にともない、1959年にアラモアナ・ショッピングセンターが新設された。さらに、ダウンタウン再開発計画により、ホノルル座や日本劇場などの劇場は立ち退きを余儀なくされ、やがて1964年に閉館した。こうしてアアラ地区の崩壊は1950年代から60年代にかけて徐々に進行し、アアラ連合のビルも1973年に取り壊された史実について、著者は明らかにしている。

続く第３章では、ホノルルの日本人人口の77％を占め、32,911人が住んだマッカレー＝モイリリ地区について説明されている。新聞記事、住所録や古地図などが活用され、この地区における居住者の職業やその経歴が明らかにされる。当時の書籍、新聞記事や日本人年鑑、彼らが残した日誌や回想記なども利用され、第４章ではマノア地区に居住した日本

人の生活が説明される。この地区は5区に分れ、第1区は上部マノアでさらに南北に分れている。北アノアでは野菜栽培業者が多く、彼らには北マノア農業組合のメンバーが多く含まれる。ワイキキから遠くないマノア地域は、観光客にほとんど知られていないものの、ここにかつて日本人農家が集まっていた面影はなく、現在ではホノルルの郊外住宅地となっている。

戦前のハワイにおいて、日本人が独占していた職業の一つに漁業がある。日本人が移住する以前のハワイでは、ハワイ人や中国人が沿岸地域で小規模な漁業を行うにすぎなかった。1885年の官約移民の渡航以降、日本人が増加するにつれて魚食の需要が高まった。それにともない、次第に耕地労働から漁業への転向者が増え、それはハワイ諸島全体に広まっていった。第5章では、ホノルルにおける日本人漁業の発展が、戦前の史料や漁業関係者の記録などに基づいて、詳細に明らかにされている。とりわけ著者は、1910年と1929年におけるホノルルの漁業関係者のうち、和歌山県と山口県出身者との住みわけを指摘している。おもにカツオ漁を営む和歌山県人は、ホノルル港やアララ・マーケットに至便なダウンタウン近隣に住む傾向があった。それに対し山口県、とくに沖家室島を中心とする人々は、当初からやや離れたカカアコ地区に居住し、次第に増加したと指摘されている。

さらに第6章でも、日本の漁業とのかかわりについての議論が続く。前述された沖家室島の漁民は、江戸末期より小型漁船で琉球諸島や朝鮮半島方面に出漁していたことが知られている。明治期以降、彼らは日本各地や海外に出稼ぎ、あるいは移住もするようになった。本章では海外で最も多い移住先となったハワイ諸島、さらに中心地であるホノルルに居住した同島出身者について、大正期に発行されたこの島の情報誌『かむろ』を中心に分析が試みられている。多数の沖家室島出身者はホノルル、とくにカカアコ地区で漁業関連業に就き、助け合いながら生活していた。同誌に掲載された情報によって、この島の出身者はハワイをはじめとする海外との交流をしていたのである。このように、1910年代には海外への分村がすでに存在していたことが、本章では実証されている。

ホノルルにおける日本人旅館について、草創期から現代に至るまでの変遷を明らかにしたのが第4章である。本章では、1920年頃までの初期の諸相がまとめられている。戦後しばらく、日本人はダウンタウンの日本人ホテルに宿泊していたが、やがて増加した日本からの旅行客はワイキキのホテルへ泊るようになった。そして、戦前からの旅行斡旋業者は戦後も日本への観光団を顧客の中心として繁栄したものの、日本の大手旅行会社の進出により、ほとんどが廃業したという。しかし、ホノルルにおける日本人社会の中心的存在として、彼らが日本とハワイとの交流に貢献してきたことは間違いない。宿泊だけでなく日本や他島への渡航手続き、および諸官庁への届出など彼らの役割は非常に大きく、それは現在も変わらない。

最後の第8章では、本書の重要なテーマが取り上げられている。まず著者は、日本人館府（キャンプ）について具体的に言及した先行研究が乏しかったと指摘する。本章では、当時の地図や個人の回想録、そして日本人年鑑の住所録や日本語新聞の記事などを手掛かりに、日本人館府の実態が可能な限り明らかになるのである。ホノルルにおける「館府」は日本人の密集地で、その言葉はサトウキビ耕地のキャンプから伝わったものと指摘され

ている。したがって、同地はサトウキビ耕地とさほど変わらない雰囲気を持っていたと思われる。このような日本人キャンプも、彼らの居住地の分散によって戦後には急激に消滅したという。

Ⅲ

本書を通読すると、カナダ漁業移民史を学ぶ評者は、本書でもハワイの日系漁業史に関する紹介にやや紙幅を割いてしまった。その反省とともに、著者のハワイへの熱い思いをほんの少しだけクールダウンする、例えるならスコールのようなコメントを差し挟むことをお許しいただきたい。

ハワイ日系移民史に関わる研究者、さらには何度もハワイを訪問する旅行者などには、ホノルルの各地区名とその位置はすでに脳裏に焼きついているだろう。しかし、斯学の初心者や一般のハワイファンには、やや不案内かもしれない。前書を知らない読者のためにハワイ、そしてホノルルの地域概観図、可能ならば日系移民史に関する年表の添付を求めることは評者のわがままだろうか。本書では『布哇新報』や『布哇報知』などの日本語新聞や、『布哇実業案内』をはじめとする報告書がていねいに取りあげられ、一次資料として提示されている。末尾の『かむろ』の転載も、同様である。それらを転載するに留まらない資料の分析と、それに関わる学術的加工を通じた歴史地理学からの考察こそが、ハワイ日系人史研究での「飯田学」として特徴づけられるに違いない。もう少し図表やグラフ、そして景観復原図の提示を試みて欲しいのは、評者だけではないと思われる。

しかし、一次資料のままの転載に著者の教育者としての意図が垣間みられる。例えば、第２章の図２－２について、大縮尺図に関わる記述がある。これまで看過されてきた北米・ハワイで作成された火災保険図の歴史地理学的活用について、これを先に紹介した評者に対して、その後の活用が滞っていることが指摘されている[2)]。その活用方法の事例を提示し、学界の発展へ寄与する著者の指導的な姿勢に敬服したい。

このように、永年にわたるハワイ日系人移民史をまとめるとともに、あえて多くの一次資料がそのまま提示された本書には、研究者だけでない教育者としての著者の一面が看取される。つまり、末尾の資料『かむろ』の転載は今後の若手研究者への宿題かもしれない。これらだけでなく、本書で紹介された一次資料を活用し、ハワイ日系移民史研究が次世代に発展されねばならない。例えば、多くの先行研究ではサトウキビ栽培をめぐる契約移民が対象となってきた。しかし彼らだけでなく、他の産業に就いた日系人についても歴史地理学的に総合的に考察した著者の前書、そして本書は極めて重要である。今後の若手研究者には、両者を踏まえた新たなハワイ日系移民史の究明に努めることが期待される。

（ナカニシヤ出版，2013年３月、202頁）

２）著者の指摘をふまえ、評者は以下の拙稿で火災保険図の読解と活用法を論じている。河原典史「『BC州サケ缶詰工場地図集成』にみるサケ缶詰産業と日本人漁業者」、立命館言語文化研究19－4、246－250、2008。